

# NBA におけるサラリーの分散に関する研究 A study of salary dispersion in NBA

1K08045 - 8

指導教員 主査 武藤泰明 先生

奥田 翔太郎

副査 原田宗彦 先生

## 【目的】

現在アメリカのプロリーグである NBA、MLB、NFL などでは、リーグ内の戦力均衡を図るためにウェーバー方式のドラフト、サラリーキャップ制のようにチームにおける人材に対しての制限をかけることと、収入分配制度のような収入面をなるべく均一にすることでリーグにおける戦力均衡を少しでも実現しようとしている。しかし、現実はこの世界においても、特に MLB や NBA において、大都市のビックチームに戦力が集中し、地方のスマールタウンのチームは少ない資金力でチームを運営すると言った格差が生じている。このように、どのスポーツ界においてもチームを強化するのに、お金をかければ強くなりスター選手に大金をつぎ込めば勝ると言った流れがある中で、今回そのような流れを防ぐためにもサラリーキャップ制を導入している NBA の選手のサラリーに注目して、果たしてスター選手へのサラリー集中が本当に勝利を呼び込むことができるか、チーム間の総サラリーの差異とも比較することで明らかであることを本研究の目的とする。

## 【研究方法】

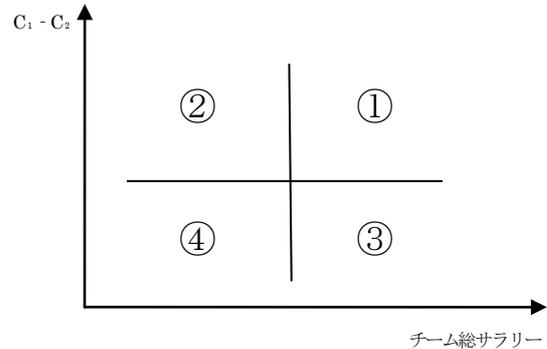
本研究では、まず Stefan Kesenne (2000) の THE IMPACT OF SALARY CAPS IN PROFESSIONAL TEAM SPORTS という先行研究を紹介し分析する。選手のサラリーを決定するチームオーナーや年齢などあらゆることを考慮にいれながら、ここに書かれている、チーム内におけるスター選手へのサラリー集中が高ければ高いほど、勝率が高くなり結果としてチームの収入につながるという理論に注目し、これを NBA の各チームに照らし合わせてスターティングメンバーをスター選手  $C_1$  として考える場合と、チーム内でプレータイムの長い上位 5 人をスター選手  $C_1$  として考える 2 方向から検討し、残りの選手  $C_2$  とのサラリー差  $C_1 - C_2$  と順位の関係性を考えることでこの論文の理論が有効であるのかを検証する。

## 【研究結果】

NBA チームのチーム内におけるサラリーの分散とチームの総サラリーの関係について以下の 4 つのパターンにチームを分類する

ことができた。

サラリーの内部分散



先行文献には、サラリーキャップでサラリーの上限を決めているのでそのサラリー内におけるチームのサラリーの内部分散であった。しかし、NBA ではサラリーキャップをオーバーしてもいい例外を認めているソフトキャップ制を導入しているため、チーム間の総サラリーにおいても分散が見られその中でチーム内分散の傾向を見てみると、①と②の  $C_1 - C_2$  の値が高いところに、チームに順位が高いチームが集まり、③と④の  $C_1 - C_2$  の値が低いところに順位の低いチームが集中する傾向が強い先行研究と同じ結果を見て取れた。しかし、総サラリーを考慮に入れると①のほうに常勝チームが、②にはここ数年のチーム作りが成功してようやく争えるチームが上がってきており、③にはチームにベテランの高額サラリーが残りチーム作りを失敗したチーム、④にはサラリーの低い若手選手が多く強豪化に向けて再建中のチームが入った。しかし、チーム内サラリー分散と総サラリーが低い④の中でも上位チームに進出しているチームがあった。

## 【考察】

NBA ではサラリーと年齢に関して密接な関係があり、上位進出しながらもサラリー総額を抑えられているチームは、平均年齢も若いという結果にもなった。スター選手へのサラリー集中が難しく限られた資金しかないスマールマーケットのチームにとってはいかに若手の有望選手を獲得して、サラリー額を抑えられる間にチームをうまく補強し上位進出を狙えるかが、これらのチームが NBA で生き残っていくカギになっていく。